

# 室町時代書簡文における「仍って」について

柏 本 雄 幸

## 一

書簡用語としての「仍」字については、「仍執達如件」のように書止語として用いられることはよく知られている。例えば「覚一本平家物語」から例を引くと、「仍牒奏如件」<sup>(1)</sup>、「仍勸進修行の趣、蓋以如件」<sup>(2)</sup>、「仍当家の公卿等異口同音に雷をなして祈誓如件」<sup>(3)</sup>など、「仍」字は、院宣、御教書、起請文等の書状の書止用語として用いられている。そのほか

○「安芸国吉田庄地頭職半分事、嫡子治部大輔広房所譲与也。……仍為後日讓状如件。 康暦三年正月十三日 元阿」

○「とさのくにはたのこれむねうちの人たんのふせ物事、四貫三百五十文あつかり申候。……よんてのちのため

にしやうくたんのことし。 康暦元年十二月廿日清水 六郎清氏」<sup>(4)</sup>

のように、讓状や預状などの証文類などにも「仍……如件」は、書止め用語として用いられている。

しかし、いま問題にしようとする「仍」字は、書止め用語の「仍」とは違った「仍」の用法があるのではないかというものである。橘豊氏の「書簡作法の研究」(昭和52年・風間書院)にも、真下三郎先生の「書簡用語の研究」(昭和60年・溪水社)にも触れられていない。また、「日本国語大辞典」やその他二、三の古語辞典にも、書止め用語の「仍」字には触れているが、今から取り上げようとする「仍」の用法には触れていない。問題とする意味もあろうかと思う。

この事に気付いたのは、千利休の書簡集を調べていた事にある。現れた順に二、三挙げてみる。

○鯛三ヶ大樽一ヶ御音信過当に候 仍宗二下次第 銀事  
頼存肝にて候……(書簡番号一・津田宗閑宛)

○昨日御筆忝奉存知候 如御詮不慮之処にて懸御目候  
態御供不参候 仍珍物一折拝領是亦忝候……(六・宛  
名欠)

○御状見申候 本望候 長々御逗留きとく候 仍茶碗請  
取申候 御上洛時可申承候……(二〇・宗有宛)

「仍」字の現れる書簡は、二百六十三通のうち三十六通に達する。意味も接続詞の「仍つて」とは異なるようである。むしろ、書簡作法上の一用語としての機能を果たしているように思われるのである。

そこで利休書簡の三十六通を対象にこの「仍」の持つ機能を見ていくことにする。往復(往来)が書簡の基本であるから、往状と返状に分け、数の多い返状から見ていく。

一 A (往状に対するお礼の挨拶の後)

①御状拜見 誠ニ御床しく存折節本望之至候 仍巻物一端贈給候 爰調法二候……(四二・博多の豪商島井宗

叱宛)

②源次郎方までの御状見申候 仍為御音信すし一おけたうみやうしのほしゐ十袋こもちかたへ給候 何かと申御きつかいとも候由……(二三・宛名欠)

③御状見申候 唯今御成候由御浦山敷存候 仍筒竹重而給候……(二四二・古田織部宛)

④昨日御筆忝奉存知候 如御詮不慮之処にて懸御目候  
態御供不参候 仍珍物一折拝領是又忝候……(六・宛  
名欠)

⑤今朝参礼本望候 仍生貝のあふりかいあり数式百ヶ先  
其ま賞翫仕候……(二五七・細川忠興宛)

お手紙を拝見したとか、お手紙を拝見してうれしかったとかの挨拶を書き出しとし、「仍」によって贈物を頂いた事のお礼を申し述べている。「仍」字の意味は、「お手紙を拝見した。それについて(それで、そこで)贈物を頂戴したが……」と理解されそうである。⑤の例などは、「今朝のお手紙ありがとうございました。おかげであふりかいを二百箇、おいしく頂きました」と解釈されなくはない。書簡であるために、多少の形式化や飛躍はあるが、「仍」は、因果関係をしめす一般用語としての接続詞に変わらないと言えそうである。

しかし、そうとは言い切れない、次のような使い方が出てくるのである。

⑥ 御札本望候 仍自在竹小口より一寸七分おかれてあなを御あけ候へく候……（二二一・藪中齋宛）

⑦ 小半さへの御札我等拝見候 仍自在竹事承候心得申候……（五五・三井寺住職本覚坊宛）

⑧ 御状見申候 本望候 長々御逗留きとく候 仍茶碗請取申候 御上洛時可申承候……（二〇・宗有宛）

⑨ 芳札過当至極令存候 仍今度遙々雖御上洛候手前に取紛無音申候処に結句御札御懇之段難謝存候……（一七八・家康の家老井伊直政宛）

⑩ 御床しく存処ニ尊札過当々々 仍雨故御普請相延御祝著たるへきと奉察候……（二五六・細川忠興宛）

お手紙を拝見してうれしかったと挨拶から書き出されているのは変わらない。しかし、「仍」で示される内容は、贈物の件ではない。⑥の例は、藪中齋から自在竹の穴はどの辺にあげたらよいかとの問い合わせがあつて、それへの返事である。「仍」の意味は、「ところで」「ついては」に相当するように思う。

⑧の例は、旅先の宗有から茶碗が送られてきたことへの返事であろう。お札の言葉がないので、それは贈物ではな

く、鑑定依頼か何かのためのものである。「長々御逗留」が感心なことと、「茶碗請取申」したこととの間に因果関係があるとは思われない。前置きは前置きとして述べておいて、「実は、ところで、ついては」と書き起こして用件を述べようとする置字であると考えたいのである。

⑨の例にしても、「お手紙ありがとうございました」の挨拶と、「忙しくしていてお手紙もしませんでした」との続き具合は、順接関係よりも逆接関係に近いものである。「仍」は、話題転換である。⑩の例も、「ところで、雨のため工事が延期したそうでお喜びでしょう」と用件を述べる働きをしている。

「仍」は、前置きから用件に切り換える際の書き出しの用語である。従つてその意味は、因果関係ではなく、話題転換であると思うのである。贈物へのお札を述べた①～⑤の「仍」を因果関係を示すとも取れるとしたが、やはり話題転換であつて、前置きではなく、用件としてあらためてお札を述べたものであると考えたい。

「仍」について、以上のような事を前提として、残りの用例を検討していきたい。

一 B（贈物に対するお札の挨拶の後）

⑪ 昨日御尋殊に唐木綿一端調法ニ候 仍やき茶碗進之候

……(一六五・宗通宛)

⑫芳翰拝受并布一端到来過当々々 仍有合任齋茶入一ヶ進之候……(六七・朝日千助宛)

唐木綿や布といった贈物に対するお礼である。「仍」字は、「贈物あたがとうございました。それで、お返しとして茶碗や茶入を差しあげます」と解釈すれば、「仍」は、因果關係を示す接続詞である。しかし、この場合も、そうでない例が出てくる。

⑬鯛三ヶ大樽一ヶ御音信過当に候 仍宗二下次第銀事頼存肝にて候……(一・天王寺屋宗閑宛)

⑭夜前忝次第二候 仍御茶碗二ヶ唯今到来候 又あかく御座候を可仕之由申付候……(一六六・羽柴秀長宛)

⑮早梅一枝忝奉存候 仍関白殿二日三日之間に下向と承候 其刻致伺万々可申上候……(九一・渡辺宛)

⑯自是可令申処結句御報被成候 唯今色々過分至極 仍色紙別字可為御秘藏候 一段見事に候……(一三九・黒田孝高宛)

⑰昨日御状見申候次白もち五十相届候 仍茶碗壺古織公とさしくミの事近比貴所の本意にて候……(一〇三・藪中斎宛)

⑱明朝可被召寄之處過分至極候参一服可被下候 仍井勘

兵へ殿御氣相弥々能御座候はんと存事候……(五六・

古田織部宛)

これらの「仍」字は、前置きとの間に因果關係はない。⑬は「ところで、宗二がそちらに着いたらお金の事をよろしく頼みます」と依頼の用件を伝えている。「仍」は、「それ故・そこで」に相当するものではない。⑮の場合も、「早梅一枝」を頂いたことと、「関白殿(が)一三日之間に下向と承」つたこととの間には、何ら因果關係は成立しない。⑱の場合も、お茶を一服いただきたいということと、井勘兵衛の病状がよくなっているだろうことは、因果關係で結ばれるものではない。ここでも「仍」字は、話題転換を意味し、用件に切り換えるための前置き語であると言える。次に往状の場合について、「仍」字がどのように用いられているかを見る。

二―A(差出しの挨拶の後)

⑲的便候状一筆申候 仍南坊昨日午時二宮古を立被申候……(一九五・蒲生氏郷宛)

⑳急度令申候御下向已来以書状不申候 仍石切三人雇申度候 遠路御造作卜存候へ共江州之石切之御用に指合申候間申入候……(一八七・細川藩家老松井佐渡守宛)

②1 久無音申候 仍壺二ヶ少納言進之 御渡所仰候……

(五九・福寿院住職宛)

②2 急用候て御報不申候 仍此中御煩由不存候 明日ハ関

白様於大坂還御被成候間不図夜放を興行申候かしく

(八〇・葛藤斎宛)

②3 近日從御陣令帰洛候 仍七夕御香典為嘉例贈進上候

延引背本意候…… (二四七・南宗寺仙首座宛)

②4 茶巾一ヶ進之候今朝忘申候 仍猪次左へ明日午時參候

…… (二〇八・古田織部宛)

これらの往状は、手紙を差しあげますとか、手紙も差しあげず失礼していたとかの挨拶から書き出している書状である。そして、「仍」字の持つ機能が実にあざやかに見とれる。「一筆申しあげる」と簡単な前置きの後、お願いや、連絡の用件を伝えている。石切職人が三人ほしいとか、この壺を少納言に渡してほしいと言った依頼の用件や、明日、秀吉が帰城するので夜話の会をするがどうかと言った連絡事項を伝えている。「仍」字が、用件を述べる文の書き起こしであることをよく示していると思う。

二―B (何らかの挨拶の後)

②5 夜前御上洛御大儀にて候 相当之御用可承候 仍錦金

地拝受候…… (二三八・宗弥老人宛)

②6 態御上洛過分不得申候 殊ニ早々御下之由御懇切之至

候 今朝先茶申候て満足申候 仍棗一 柄杓一 竹蓋

をき一 三色進申候…… (二三八・箕庵老人宛)

②7 明朝御出満足申候 仍御迎ニ參唯今罷帰候…… (一五

〇・大谷刑部少輔吉繼宛)

②8 御帰目出度存候 仍此壺一段見事存候 何も懸御目可

申承候…… (二〇〇・芝山監物宛)

②9 唯今懸御目候 仍来四日朝可致伺公候…… (二五三・

細川忠興宛)

「何らかの挨拶」としたが、上京の労をねぎらったり、茶会への出席を感謝したり、無事の御帰還を祝ったりなど様々である。②5②6の例のように贈物の遣り取りになると、「仍」が「それで」の因果関係に解釈されそうであるが、他の諸例からは否定される。②7は、秀吉の御迎えに行つて今帰つたところだと伝えている。②8は、依頼されていた壺の鑑定結果の報告である。②9は、四日に伺候する予定だと連絡したものである。いずれも前置きの挨拶と因果関係にあるものではなく、「仍」は話題転換であり、用件を述べる本文の書き起こしである。

また、往状の中には、次のような一類型が認められる。

今まで見て来た書状は、「仍」の前文が、お礼の挨拶とか

差出しの挨拶といった前置きのなものであったが、前文で大事な用件を述べたものがある。

二—C (用件を述べた後)

③〇道隠和尚墨蹟直筆二候殊更見事存候 仍為御音信杉原二束到来候過当至候 次糺茶入大小式ヶ進之候恐惶不<sub>レ</sub>宜。(二三五・六戸善兵衛尉宛)

③①自是御音信可申処に結句御返事二罷成候今度湯相<sub>（あつ）</sub>当<sub>（あた）</sub>申候 仍芟喰被懸御意候過分……(九八・宛名欠)

③②御壺紹安上林二渡申候 御茶事念を入可申付候 仍逗留中八木之事忝次第二候 懇二御使可申入候恐惶謹言。

(二六八・柘植左京宛)

③③御札忝候 明日の御さうちハ少くもの巢<sub>（ねど）</sub>なとはり候て

もくるしからす候其外ハ別に御隙いらぬ物候 我等もいにしへハ茶の湯をも仕候ツル 仍御わたし<sub>（おご）</sub>ハ当年中に延申候大慶候 御上洛も廿五六日と申候かたく目出度候……(一七〇・津田隼人宛)

③④御城へ参今帰申候 何へも御隱密事先心得申候 明日兵太へ参候間帰候者御左右可申候 さてもく御大儀是非なく存候 仍筑州事噂迄申候 可懸御目候 恐惶かしく (二五九・細川忠興宛)

③⑤態々御飛脚過分至極候 富左殿柘左殿御両所為御使堺

迄可罷下之旨御錠候条俄昨夜罷下候 仍淀迄羽与様古織様御送候て舟本ニて見付申驚存候由頼存候恐惶謹言。

(二六〇・松井佐渡守宛)

用件を伝えた後で「仍」の文が付加されるという形式になっている。利休の書簡には簡潔なものが多く、③①～③②の書状などは、短い前置きの後で、「仍」文が始まっているかのように見える。しかし、書状の内容をよく見ると、そうではない。③①は、依頼されていた墨蹟や茶釜の鑑定結果を知らせるという用件の後で、「仍」文が始まっている。始まっているというよりは、付け加えられているのかもしれない。③②も同様に、依頼されていた用件が無事に済んだ事を知らせている。書状の内容として大切なものは、「仍」文より前の部分である。

用件が複雑であったり、丁寧に書かれたとすると、用件の部分が長々となり、その用件の結びに、「ところで、先日は結構な贈物を頂いてありがとうございました」などとお礼で終わるようになるのであろう。それが③③～③⑤の場合である。③④の書状は、具体的内容がよくわからないが、城から帰った事、これは秘密にする事、明日またお手紙をする、いずれにしろ御辛勞をかけたと、用件を述べ、ついでのように「ところで筑州の事は、噂程度に申しとおきまし

た」とあるものである。

③⑤の書状は、利休最後の書状と言ってもよい。秀吉に蟄居を命じられ、堺に下った事を伝え、ついでだけでも細川忠興様に見送りのお礼を申し伝えておいてほしいと述べたものである。

これらの「仍」は、用件の後、つまり手紙の末尾に用いられているが、その意味は、因果関係を示すものではない。これまで見てきたと同じように、話題の転換を示すものである。また、この「仍」には、贈物の遣り取りに関するものが三例ある。注目しておきたい。

以上、千利休の書簡における「仍」字の用法に触れてきた。「仍つて」が、因果関係を示す接続詞ではなく、話題転換の置字的なものになっていることを述べた。話題転換の置字も、用件を起こす場合と、用件を結ぶ場合の二種類があることを示した。しかし、全体的には用件を起こす場合が多く、それが「仍」の書簡用法として固定化しつつあるように思えた。

利休書簡には、用件を起こす置字として、

○尊書忝又是迄御出之由を申候 旁々忝次第二候 抑明  
日午刻各来臨事殊更菊様勸大様何も御同心之由奉忝存

候……(九〇・宛名欠)

○政宗公唯今御尋之事外聞忝次第候 抑御太刀一腰馬代  
金拾両拝悦是又過分……(二四三・木村弥一右衛門尉宛)

二例であるが、「抑」を用いたものがある。「抑」を用いた書状は、大仰で、格式ばっている。それに比べると、「仍」は、通俗的な感じがする。書簡によく用いられた由縁であらう。

### 三

「仍」字の使用について、利休の書簡以外ではどうかの  
かに触れておきたい。桑田忠親著作集に「戦国武将の手紙」(著作集三)、「織田信長の手紙」(著作集四)、「太閤秀吉の手紙」(著作集五)、「徳川家康の手紙」(著作集六)、「女性の名書簡」(著作集七)など、かつて単行本として出版されたものが再収録されている。また「茶道と茶人(三)」(著作集十)には、古田織部の書簡が資料として用いられている。これらの中には、読者のために読み下されたものもあり、必ずしも原文通りではないようである。直接元資料に当らなかった事には問題があるが、参考までに利用した。

「戦国武将の手紙」には、百五十通余の書簡が収録され

ている。全てというわけではなく、主だったものであろう。その中の三十三通に「仍<sup>に</sup>つて」が用いられている。

①急度啓せしめ候。よつて信甲の人衆、今十六、駿州の内、深沢と号する新地へ寄せ来たり候。……（北条氏政・永祿十二年六月十六日）

②急度馳脚申し候。よつて、田村安子島の地を抱え、別心のよし、其口へ如何様に相聞こえ候や。……（伊達政宗・天正十六年二月十四日）

③幸便の条書札に及び候。よつて、浅野殿より御意見には、中納言様岩瀬に今月中は御滞留たるべく候間、其の間慥かなる人一兩人もしかと付置き然るべきよし承り候。……（伊達政宗・天正十八年十月廿一日）

④わざと筆を染め候。よつて、昨日五、大坂に到り出頭を遂げ候。御気色の様子大形書載せしめ候。……（大友宗麟・天正十四年卯月六日）

⑤御慶重畳、際限あるべからず候。よつて、昨日野伏を進め候。御手の衆一段御難儀の相に候。然らば、御手負数多候。……（毛利元就・天文十年一月四日）

いずれも短い前置きの挨拶の後、「仍<sup>に</sup>（よつて）」によって用件を起こすという形式である。全書簡中、一般用語としての接続用法は、一例も認められなかった。「仍<sup>に</sup>」が書簡

では書簡用語として固定化していると考えさせられる。

「織田信長の手紙」には、下知状や掟書を除くと、六十通近くの書簡が収録されている。そのうち、十二通に「仍<sup>に</sup>（よつて）」が用いられていた。

⑥先度使僧差しのぼされ候。殊に鵜鷹すえ給はり候。自愛少なからず候。よつて、大友宗麟累年京上望みのよしに候。此のごろも案内におよばれ候といへども、其の方別して申し通はす半ばに候条、遠慮せしめ、未だ返答能はず候。如何があるべく候や。……（元龜三年五月二日・小早川隆景宛）

⑦廿九日の注進今日到来、披見候。よつて、駿州において穴山謀反によつて、甲州へ北退<sup>ひきたひ</sup>くの旨、召仕ひ候藤沢走り入り申すのよしに候。（中略）なお、慥かに聞き届け、追々注進待入り候。……（天正十年三月三日・甲州出陣中の長男宛）

⑧芳翰の趣本望に存じ候。よつて、去る七日御入洛、江南に至り著陣せしめ候。……（永祿十一年九月二一日・直江大和守宛）

引用は一部にとどめた。⑥は、お礼の挨拶を述べ、実は、宗麟が上京を希望しているが、その方はどうするか、意向を確認する内容の書状である。⑦は、手紙を受け取った



ことを述べ、穴山が甲州へ逃げたという連絡があったので、そちらで確認するようにと命じたものである。⑧は、上杉輝虎の家老にあてて、いよいよ上洛の時が近づき、今、江南に着陣したところだと、自分達の動向を知らせたものである。いずれも、「仍（よつて）」は、因果関係を示すものではなく、用件の書き出しを示す書簡用語である。

「太閤秀吉の手紙」には、「仍（よつて）」の使用書状が六通あり、「徳川家康の手紙」には、二十一通あった。すべて話題転換で、前置きのあと、用件を書き出すというものであった。

古田織部の書簡は、六十通あまりが資料として使用されていた。そのうち七通に「仍」が用いられていた。織部については、原文のままの書状が引用されているようなので記しておきたい。

①御札忝存候 仍瀬戸茶入レ見申候。……（本阿弥光悦宛）

②御札拝見仕候誠此間不致祇候候 仍御水さしノふた共見申候……（毛利秀元宛）

③御札拝見仕候 仍明後日十六日に御成之由珍重存候……（伊達政宗宛）

④先剋之御状出京候而唯今罷帰拝見申候 御帰を不存候

而疎意之様二候 仍為御宮<sup>（みやぎ）</sup>寄唐之金壹枚染付之皿十南蛮菓子壹壺ツ被懸御意候忝存候……（横浜一庵宛）

⑤先日者御尋殊丁子三紙袋御持参候過分存候其刻他行候て不懸御目候其後御宿を不存候而御尋不申候 仍明日廿八日ノ朝御茶可申入由以覚甫を申入候……（慶長四年二月二七日・神谷宗堪宛）

⑥名物之瓜一籠拝領忝存候 仍従上様かぶらなしノ御花入御拝領被成候由唯今年御名譽義候……（毛利秀元宛）

⑦此中無音迷惑仕候 仍来二日之昼御茶上申度存候……（慶長十二年壬午二月六日・信門宛）

簡単な前置きの後で、用件を切り出すという形式のものが多く、⑤の例は、前置きが長くなっている。御尋ね下さったが、留守をしてお会い出来なかった、しかし御宿を知らなかったのでお尋ねもしなかったと詫びたものである。博多の豪商が上京した時の事であろう。長文であるが、内容は挨拶であり、「仍」はやはり用件の書き出しと見てよからう。

利休書簡以外の同時代の書簡における「仍」を見て来た。書簡における「仍」字がある特定の機能を果たしていた事は、確かなものと言えよう。その一つが、用件を切り出す

ための置字であった。

それでは、「仍」のもう一つの働きであった結びの用法はどうであろうか。

「戦国武将の手紙」には、十五代將軍足利義昭の書簡が三十通あまり採られている。そのうち六通に「仍（よつて）」が用いられているが、いずれも結びの用法である。

①出張の儀について、祐阿を差下すところ、嚴重の趣、殊に智光院をのぼせおき、一書を以て言上の旨、比類なき儀、感悦極まりなく候。併せて、当家再興の基に候。よつて、太刀一腰、黄金百両到来、喜び入り候。

なほ、大覺寺門跡演説あるべく候なり。（永祿九年三月十日・上杉謙信宛）

②こんど織田事、天命遁れ難きによつて、自滅せしめ候。それについて、相残る輩帰洛の儀切々申候条、示合せ、急度入洛すべく候。此の節別して馳走悦喜すべし。仍つて、太刀一腰、黄金拾両到来。喜び入り候。なお、昭光・昭秀申すべく候なり。（天正十年十一月二日・島津義久宛）

③帰洛の儀、上口より言上の趣、委細、柳沢新右衛門尉に相含め、これを差越し候。此の節一廉馳走候様、義久に對し申し聞かすべき事、喜び入るべし。仍つて、

肩衣・袴を遣わし候。なお、昭光・昭秀申すべく候なり。（天正十二年九月四日・島津義弘宛）

④九州表に至り出勢のよし、方々苦勞、感じ覚え候。見舞のため、家孝を差越し候。よつて、帷袖遣わし候。次に、去る年以来申し越す予州料所事、此の刻一廉馳走においては、悦喜すべく候。なお、昭光申すべく候なり。（天正十四年八月十一日・小早川隆景宛）

⑤在國中種々馳走、祝着の通り、早々申し越すべきところ、とかく打ち過ぎ候。誠に忠功の段、更に忘却なく候。いよいよ諸事頼み入り候。よつて、太刀一越し、馬一疋、并に帷甘遣わし候。委細、昭賢・行長に申し含め候なり。（天正十六年後五月廿四日・小早川隆景宛）

⑥其の表永々在陣、苦勞是非に及ばず候。殊に都表において、自身手を碎き防戦、比類なき趣によつて、太閤別して御感淺からず候。誠に名譽の段、身におゐて満足これに過ぎず候。早々見舞として申し越すべきところ、遠方故、とにかく遅々、本意に背き候。よつて道服給帷これを進め候。目出、やがて帰朝たるべき間、其の節を期し入り候なり。かしく。（文祿二年五月廿六日・小早川隆景宛）

用件の結びの用に於て用いられているこれらの「仍（よつて）」は、すべて贈物の遣り取りについてである。①②は、贈物を受け取った書状、③④⑤⑥は、贈物を贈る書状である。利休書簡においてもそうであつたが、贈る際の「仍」は、一見して因果關係を示すように理解される。例えば、⑤を例にとると、「いよいよ諸事頼み入り」ます。そのために、「太刀一腰、馬一疋、并に帷甘」を贈ると、理解されなくてはならない。しかし、①を例にとると、あなたの「比類なき」勳きは、「当家再興の基」と期待している、そのため太刀一腰と黄金百両が到来したというのでは不自然である。「仍（よつて）」は、話題転換の「ところで」でなくてはならない。従つて、これらの「仍（よつて）」は、書簡用語のものと理解するのである。

このような用法を他の書簡に求めていくと、

⑦（重ねて音信として綿五把到来、懇切に候。）こんど本願寺所行を以て、所々一揆蜂起せしむるのところ、其の方こと、別義なき覚悟の通り聞届け、祝著候。此の表、近々利運たるべきの間、帰国すべく候。然らば、門下の者の事、男女に寄らず、櫓械の及ぶほど成敗すべく候。其の方の儀は、こんどの勳き、神妙の条、立て置くところに候。心易かるべく候。よつて、蜜柑一

籠、ならびに白鳥、祝著に候。なお、新八申すべく候。恐々謹言。（永禄十三年十一月十三日・聖徳寺宛）

信長の書簡である。聖徳寺が本願寺門徒の一揆に参加しなかつたことを褒めたもので、帰国後は、男女によらず本願寺門徒を探し出して、徹底的に成敗するつもりだが、其の方は安心してよいと知らせている。結びの「よつて」であるが、贈物を受け取つたお礼であるから因果關係は不自然である。やはり話題転換である。

⑧去る年、畿内所々在陣について、尋ね承り候。本望の至りに候。天下の儀、異なる子細なく候。恐れながら、賢慮を安んじらるべく候。随つて、貴辺、隣国御存分に属せしむるのよし、尤もに候。よつて鷹の儀について、たびたび申し入るゝといへども、珍らしき鷹これあるよし、聞き及び候間、かさねて差し遣はし候。御分国異儀なきやうに候はゞ、快然たるべく候。なほ、後音を期し候。恐々謹言。（元龜二年三月廿日・上杉謙信宛）

同じく信長の書簡である。贈物に鷹を差しあげるといふものである。「よつて」は、贈る際のものであるが、⑦の例を参考にするまでもなく、この書状の文脈からして話題転換である。

⑨ 珍札披見、快然に候。本意の如く、こんど遠参に到り  
発向、過半本意に属し候。御心易かるべく候。そもそ  
も、公方様、信長に對せられ御遺恨重疊ゆえ、追伐の  
ため、御色を立てらるゝのよしに候条、此の時無二忠  
功を励まるゝ事肝要に候。公儀御威光を以て、信玄も  
上洛せしむれば、他に異り申し談ずべく候。よつて、  
寒野川弓三十張到来、珍重に候。委曲、かの口上に付  
するの間、具し能わず候。恐々謹言。(元龜三年五月  
十七日・松永彈正少弼の老臣宛の武田信玄書簡)

⑩ 神前において精誠を抽んでられ、御玉会守符到来。謹  
んで頂戴おわんぬ。そもそも当郡かくの如き本意、併  
せて明神庇護に候。よつて、太刀一腰、宝殿に納め奉  
り候。いよいよ武運長久の祈念憑み入り候。恐々謹言。  
(天文十一年八月十日・諏訪上社々主宛の武田信玄書  
簡)

⑪ 氏真帰国に就いて家康へ誓句を以て申し届け候ところ、  
御返答の誓詞速かに到来、本望に候。殊に氏真、なら  
びに当方へ無二御入魂あるべきよし、大慶に候。なか  
んづく、懸河出城の刻、其の方半途に至り、証人とし  
て入来のよし、誠に以て手扱い、喜悅に候。今より以  
後は、家康へ別して申し合わすべく候条、然るべき様

に馳走まかせ入り候。よつて、馬一匹黒これを進め候。  
なお、弟に候助五郎申すべく候。恐々謹言。(永祿十  
二年五月廿四日・家康の部将酒井左衛門尉宛の北条氏  
政書簡)

⑫ 近年所々において軍労、殊に先年田北紹鉄討捕り、高  
名忠儀の次第、今に忘却なく候といえども、闕地等こ  
れなきによつて、其の感ならず候。必ず時分を以て、  
義統と申し談じ、一稜<sup>ひととぎ</sup>扶持を加うべく候。よつて、  
道列・竜閑申す旨にまかせ、少しの所に候といえども、  
先ず以て、五馬庄の内、中畑壺町分の事、これを預け  
遣わし候。知行あるべく候。恐々謹言。(天正十二年  
卯月十六日・財津久右衛門尉宛の太友宗麟書簡)

信長の書状以外にもこれらの諸例が見付かった。いずれも  
「仍(よつて)」によつて示される内容は、贈物に関するも  
のである。⑨の書状のように贈物を受け取る際の使用もあ  
るので、これらの「よつて」は、話題転換であると理解す  
べきである。

⑬ 奥州・同右金吾より委趣示し給はり候。祝著の至りに  
候。畿内ならびに分国の躰、尋ね承り候。去る年志賀  
郡在陣の砌、具に啓達候ひし。それ以来いよいよ異る  
子細なく候。江州の内中郡に佐和山と申す敵城候ひき。

此のごろ追払ひ、平均に属し候。御心易かるべく候。  
よつて、丹但の賊船、雲伯表に至り、差出づるのよし、  
是非なき題目に候。上意として御下知を加へられ候様  
に奏達せしめ候。拙子よりもなほ申し送り候。其の様  
子、柳沢新右衛門尉申すべくの間、再筆能はず候。  
恐々謹言（元龜二年四月十一日・小早川隆景宛の信  
長書簡）

結びのように思われる「よつて」の中で、贈物の遣り取り  
に關係のないものが、この一例であつた。こちら側の様子  
を述べ、安心してほしいと伝えた後で、雲伯表に兵庫の賊  
船が出没するそうだが、けしからぬ事であると述べている  
「よつて」は、話題転換の「ところで」に相当する。

利休書簡の「仍」字の用法に、用件を起す用法と、用  
件を述べた後の結びの用法があると述べたが、その事は、  
他の書簡によつても確認することが出来た。しかも、結び  
の用法には、贈物の遣り取りに關するものが多いと指摘し  
ておいたが、その事も確認する事が出来た。

#### 四

残された問題は、書簡におけるこうした「仍」字の使用  
が、いつ頃から始まり、どのようにして使われなくなつて

いたかである。「大日本史料」などによつて丹念に調べて  
いく必要があろう。今はそこまで進んでいない。とりあえ  
ず往来物や書札作法書などどうなっているかを調べてみ  
た。「日本教科書大系」の「古往来（一）四」と、第八卷の  
「消息」と、「群書類從（正統）」によつた。

「仍一如件」の形式は、「明衡往来」にすでに「仍件等珍  
味可被求送之状如件」（六〇表）のように四例認めら  
れたが、この形式には触れないことにする。

①初秋七夕牛女相会之候也。仍排茅戸可招兩輩之好  
士。（一四表）

②只今可出仕事侍。仍不尽紙上。（六一裏）

明衡往来の「仍」である。因果關係を示す接続詞であり、  
書簡用語の「仍」とは言えない。こうした一般用語として  
の「仍」は、数多くあるので、各往来物から参考までに一  
例ずつ示しておく。

⑦何処疎略。仍今夏冬装束奉回（和泉往来二月復・  
平安末期）

⑧仙院有觀覽。仍舞童殊撰定骨法之輩、（釈氏往来二  
一往・鎌倉初期）

⑨庭儀事、於山門者、邂逅之大儀。不聊尔候。仍先  
年於武家、等持禪寺兩度及此儀、候。（山密往来

七往・南北朝

⑩ 俄<sup>カニ</sup>上洛<sup>カニ</sup>事候故也。仍<sup>ナラ</sup>明日参上、可<sup>タ</sup>令<sup>シ</sup>申候。(南都往來一復・南北朝)

⑪ 山門相共訴訟<sup>ニ</sup>、仍<sup>ナラ</sup>於大乘灌頂<sup>ニ</sup>、導師者、所<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>停止<sup>ニ</sup>東寺也。(十二月消息八復・室町初期)

⑫ 歴然露顯<sup>ニ</sup>。仍<sup>ナラ</sup>即蒙<sup>ニ</sup>御裁許<sup>ニ</sup>、令<sup>ニ</sup>安堵<sup>ニ</sup>候。(尺素往來下・室町初期)

⑬ 今朝者隣里、音信難<sup>カ</sup>通、依<sup>テ</sup>知<sup>リ</sup>已來往既止<sup>ニ</sup>。(蒙求臂鷹往來十二往・室町後期)

⑭ 誠<sup>ニ</sup>倦遊有<sup>ル</sup>余辰也。仍<sup>ナラ</sup>而花苑之御幸一定之由示給、(新撰類聚往來一復・室町後期)

これらの一般用語としての「仍」字は、利休やその書簡類には見出せなかつたのに、往來物では、室町時代成立のものにも見ることができ。実用的な書簡文章というよりも、正式な漢文体文章としての意識が強かつたためかと思う。

ところが、往來物に書簡用語の「仍」を見出すことが出来た。「古往來(一)」に、原題がなく、編者によつて「会席往來」と名付けられた六状からなる小さな往來物がある。

その中に

⑮ 有増会席頭役、我等当月相勤候。遠路雪天、雖<sup>モ</sup>可<sup>シ</sup>為<sup>ル</sup>御大儀。御乗物可<sup>タ</sup>申付<sup>タ</sup>候。御出座奉<sup>リ</sup>仰候。仍<sup>ナラ</sup>任到

來、新五荷、炭十籠、表<sup>シ</sup>寒氣之便<sup>ニ</sup>、進候。是非年内一夕、閑談之念願計<sup>ニ</sup>候。御同意、尤<sup>モ</sup>可<sup>シ</sup>為<sup>ル</sup>感悦<sup>ニ</sup>候。恐々謹言(第一状)

⑯ ……(連歌会席の当番という事です) 相應之御用之事、被<sup>レ</sup>仰越<sup>サ</sup>、可<sup>レ</sup>令<sup>ム</sup>馳走<sup>セ</sup>候。相構々々、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>御心置<sup>ニ</sup>候。仍<sup>ナラ</sup>到來候間、無塩之鯛一懸、水鳥五、御茶子重箱一折進入候。御賞翫候者、可<sup>タ</sup>為<sup>ル</sup>喜悅<sup>ニ</sup>候。

恐々謹言(第二状)

⑰ 左曆漸欲<sup>ニ</sup>局尽<sup>ニ</sup>候。御紛共、察<sup>シ</sup>申候。拙子者隱者徒然之体。可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>御推量候。仍<sup>ナラ</sup>納豆三荷、時節之御案内計<sup>ニ</sup>候。恐々謹言(第三状)

三通に「仍」が用いられていた。意味は話題転換であり、結びに用いられ、内容は贈物を贈る挨拶である。まさに書簡用語の「仍」である。

「会席往來」については、選者も選作年代もはつきりしないが、「天正八年十二月三日書之」の書写年月日の識語が記されている。「室町中期ごろの作であろう」と推測されている。そして「文脈も用語も、非常に平易化して、氣取ったところや、飾ったところがなく、吉野時代におく、安土桃山時代にちかい文体である」(「解題」より)と評価されている。

さらに、「古往来<sup>(二)</sup>」にやはり原題がなく「村田経次学習手本・消息手本」と名付けられた消息語句集がある。その用句集に

⑮「仍雖輕微之至候、御樽十荷、並御肴三種、進上仕候。雖乏少候、雖左道之至候、杉原十帖、扇子一本、太刀一腰、御馬一疋、致進献候。……」

つまり、贈物を贈る際の用句集の中に出ており、「仍」がその書き出しの置字であることを示している。しかも、雑事、雑用の短文集の中に、奇しくもその實際例が出てくるのである。

⑯頃者御学文殊無御休息之やうに承候。各褒美被<sup>レ</sup>申候。仍一枝懸御目候。可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>覺机下御眠候。……

「村田本消息手本」は、識語に天正四年とあり、さらに、日向国高原衆の一人で、童姿のまま寺に住みこんで勉強していたことがわかる。その際に使用した手本と思われる。「俗にくだけた消息用句」集であると解説していられる。

「村田本消息手本」といい、「会席往来」といい、当用的・実用的往来物というところに、この「仍」が出現する原因なのかもしれない。

同じく、実用的往来物に「貴理師端往来」がある。実際に使用された消息を集めて手本としたものである。成立は、

永祿十一、十二（一五六八・九）年頃と推定されている。

①面拝之後、中絶良久、申後候事非本懷候。仍從吉方送給候之条、珍物令遣入候。御賞翫候者、可為畏悅候。

猶期後面之時候。恐々謹言（第一部・一）

②八朔之御祝儀尤以珍重候。仍任<sup>レ</sup>嘉令<sup>レ</sup>御太刀一腰令進献候。寔表<sup>レ</sup>御礼計候。万端可<sup>レ</sup>得貴意候之条、

先以令<sup>レ</sup>省略候。恐惶謹言（第二部・一五）

③連々可申入候之處、取乱候之条、無音心外候。仍任<sup>レ</sup>現來唐布十端、木綿甘端、砂糖一百斤、白糸卅斤、此等之趣、令進覽之候。御取合頼令存候。恐々謹言。（第一部・一九）

④歳暮之御古慶重畳不可<sup>レ</sup>有休期候。仍為御祝例白綿五拾斤令進献候。右之御祝儀計候。猶以<sup>レ</sup>面可<sup>レ</sup>申述候。恐惶謹言。（第二部・二〇）

⑤任<sup>レ</sup>御大切令<sup>レ</sup>啓入候。仍其塚靜謐之由承<sup>レ</sup>候。珍重候。此方茂属<sup>レ</sup>無事候。可御心安候。猶彼吏可申入候之間、先以閣<sup>レ</sup>筆候。恐惶謹言。（第二部・一八）

⑥遙久不能向顔候。旦夕御床敷存計候。仍貴理志端中何事無御座之由候。珍重候。涯分可被添<sup>レ</sup>御心令存候。諸事。恐恐謹言。（第二部・二六）

第一部と第二部を合わせて三十通の書状が収録されているが、そのうちの六通に「仍」が用いられている。前置きの部分は、時候の挨拶とか御無沙汰等の挨拶の短かいものである。「仍」によつて示される内容は、贈物を贈るという用件が四例と、何事もなく無事であることへの喜びを伝えたものが二例である。贈物を賜る際の「仍」が、因果関係を示すように見えるが、そうでない事は、すでに色々と述べて来たところである。「仍」は、用件を示すための話題転換である。

それにしても、「仍」字と贈物との関係は深い。貴理師端往来の三十通のうち、贈物を賜る書状が四通、返礼として贈物をする書状が四通、贈物を受け取った書状が四通ある。返礼の場合は、「又目<sup>り</sup>是」「從<sup>レ</sup>是も」「從<sup>より</sup>爰<sup>こゝ</sup>許<sup>もと</sup>も」となっている。そして、贈物を賜る書状は、すべて「仍」が用いられている。「会席往来」も「村田本消息手本」も、贈物を贈る用件には、「仍」が用いられていた。続群書類従所収の「書簡故実」は、序文によると、「天正年中、小笠原大膳大夫長明、切磋琢磨して書札法を改<sup>り</sup>め、さらに「近く菊亭右府公草案をかんかへて」成立したものとある。天正年間（一五七三―九一）以後の成立と考えられる。その書札作法にも

○連々申入度存候砌、半竹斎上洛之間令啓候。心底具可被申入候。幸令存洛仍候之間御用蒙仰不可有疎意候。仍御太刀一腰進覽之候。猶重而可得御意候。恐惶謹言（四九八頁）

○雖未申通候令啓候。抑為御代替御札御太刀一腰御馬一正進上仕候。可然様御披露頼存候。仍太刀一腰、馬一正進上候。向後者別而可申談覚悟候。恐々謹言。（四九八頁）

このように書状の結びではあるが、贈物を贈る際の「仍」字の使用が認められる。「書簡故実」には、引用した以外に二例あった。贈物を贈る際のあらたまつた心を伝える置字が「仍」であつたようである。

これらの事を総合すると、貴理師端往来の「仍」字は、前置きから用件を起こす際の「仍」と、贈物を贈る際の「仍」とを兼用したものであり、実に要領を得たものと言えよう。

ところで、書札作法書に、用件を起こす際の置字の「仍」について言及したものがあつたかを調べたが、見当たらなかつた。しかし、ロドリゲス大文典に見出すことができた。

○発端の挨拶に次いで、直に書状の内容を次の語で書き



出す。

Yotte (仍)。nauo (尚) の意。Somosomo (抑)。

Sale mate (扱又) の意。

xicareba (然者)

これによって、「仍」が前置きから用件に移る際の置字であった事が確認でき、またロドリゲス大文典の言う「Yotte (仍)」が、書状において具体的にどうであったかも確認できたのではないかと思う。

これらの「仍」は、その後どうなっていたのであろうか。「日本教科書大系第八卷消息」には、江戸時代の往来物が収録されている。その中の「松永貞徳文集」(慶安三・一六五〇年に板行)には

①年甫之御慶目出度申納候。仍当月中嘉例、祈祷連歌張行仕度候。(一)

②珍翰拜受、歓悦不淺候。仍東山西郊之最中付、可被催興之由一段神妙候。(一九)

③懇令啓候。仍元暦之古、於八嶋磯、源平両家戰、其方之太刀被「打折」御逃候処、御申志古呂引切、御首不取、御命扶候。其情御忘候哉。……(三七)

④御愛想連歌御開候者、懷紙可令「恩借」候。仍如嘉例、比叡山阿闍梨・醍醐律師請申候。……(六二)

⑤此中者御肝煎故、彼一儀容易相済満足仕候。輕微至候得共、帷二任「到来」進候。仍今日宇治御越之由候。……(六六)

⑥昨夜者歴々御月見被「召加」、当代名人衆詩歌共致「聴聞」、相「叶」冥嘉候而一入祝着仕候。仍明後御靈祭結構出立、飜物・雜物・鶴鉦・大縄、相渡申候由承及候。(一一三)

⑦御状拝見申候。仍明朝御齋之事。三膳可然木具共御誂候哉。……(一二七)

このように用件を切り出す置字として「仍」が多く用いられている。贈物を贈る際の「仍」ではなく、純粹に用件を切り出す用語である。しかし、江戸初期の貞徳文集に見られた「仍」は、その後の往来物には出て来ないのである。そして、元禄五(一六九二)年板行の往来物である「用文章綱目」には、

①貴墨飛来如「御意」暖炎熾候。仍為「御到来」名所之甜瓜一籠被「下」、不淺尋存候。(上八・返)

②御元服被「成候由珍重に存候。御年比被「申骨柄似合可申与懸御目申度令「存候。仍而御祝詞為「可「申入、乍「乏少「裏付之袴」二具進候。(下七・往

二例の「仍」が出て来る。用件を切り出すというよりは、

贈物の遣り取りに関する「仍」のように思われるのである。

さらに、享保六（一七二二）年板行の「文林節用筆海往来」には、「仍」字が十二例あり

①不才義成人之道未<sup>だ</sup>克<sup>へ</sup>尽<sup>へ</sup>候得共、積<sup>み</sup>年無<sup>く</sup>是非致<sup>し</sup>束髮候。仍早速預<sup>め</sup>御示、殊に結構之御音物送被<sup>さ</sup>下忝頂戴申候。（三三二頁）

④以外之大雨殊に貴刃洪水出申候由承驚申候。御一家別条無御座<sup>二</sup>候哉。為御見舞<sup>レ</sup>如此に御座候。委細使之者に被<sup>さ</sup>御知<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>さ</sup>下候。仍任<sup>じ</sup>見來<sup>き</sup>乾魚令<sup>し</sup>進入<sup>し</sup>候。（二八三頁）

⑤以佳日御同室様<sup>いはいおび</sup>纏<sup>い</sup>帯被<sup>さ</sup>成候由目出度存候。追付世続御誕生候而勇々敷御果報共<sup>しんじ</sup>湊可申候。仍而乍<sup>し</sup>卜少<sup>し</sup>羽<sup>し</sup>二重<sup>し</sup>二色令<sup>し</sup>猷覽<sup>し</sup>候。（二八三頁）

十二例ともこのように贈物の遣り取りについて用いられている。現在でも表彰状などで、「よつてここに〇〇を贈りその榮譽を称えます」と言い表わす形式に引き継がれているものであらう。前置きから用件を切り出す「仍」は、一例も見出すことができなかったが、すでに用いられなくなったのであろうか。

岩波文庫所収の「芭蕉書簡集」を調べたが、

①此中ハ御尋被下候処、近在へ参候而、御め二かゝらず

残念不少候。さてハ貴様ニも近々田舎へ御下向之由、段々寒氣に赴候而御苦身千万に存候。……（四五頁）

②如行方之返書御とゞけ被下毎事御世話忝候。さてハ貴方ニも近々長州へ御下向之旨、寒氣之節御太義千万に存候。……（四六頁）

③会共可有之と察入存候。さてハ上野にて致候発句御申越被成候。……（五八頁）

④宝寿院と申僧今日上京候に付申上候。弥御別条無之哉承度候。さては先頃御たのみ申上候額字而出来候は、此僧に御渡し被<sup>さ</sup>下度候。……（一四九頁）

前置きから用件を切り出す置字は、「さては」になっている。もちろん不十分な調査であり、確かな事は言えないが、用件を切り出す置字の「仍」は、室町時代から江戸初期に用いられたのではないかと思っている。そして、結びの部分で、贈物を遣り取り述べる。特に贈物を贈る際の「仍」は、遅くまで使用されていたと推測するものである。

#### 注

（一）卷四の「山門牒状」「南都牒状」より。

（二）卷五の「勸進帳」より、延慶本には「仍勸進者之趣蓋以如斯」とある。

- (3) 卷七の「平家山門連署」より。延慶本には「仍当家公卿等異口同音作礼而請祈如件」とある。
- (4) 松岡久人編「南北朝遺文・中国四国編」巻五より引用。
- (5) 桑田忠親著「定本千利休の書簡」昭和四十六年東京堂出版による。
- (6) 邦訳日葡辞書では、「Yotte。ヨッテ（依って、仍って）……よって、……の故に。それ故、そうであるから、など」と説明している。
- (7) 「鎌倉遺文」や、松岡久人編「南北朝遺文九州編」「同中国四国編」を部分的に調べてみたが、見当たらなかった。室町時代あたりのものかと推量している。
- (8) 土井忠生先生訳書六九七頁。「書状に於ける書き言葉の文体に関する論」より。